

うえむら かずひで  
植村 和秀

法学部 教授

法学士  
政治思想史

### 学内における活動

□法学部長・法学研究科長

### 学外における活動

□国際日本文化研究センター共同研究員

□奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員

### 主要な研究業績

□廣岡正久・木村雅昭編『国家と民族を問いなおす』、ミネルヴァ書房、1999年（共著）。

□植村和秀『丸山眞男と平泉澄——昭和期日本の政治主義』、柏書房、2004年（単著）。

□植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争——京都学派と原理日本社』、柏書房、2007年（単著）。

### 最近の研究業績

□植村和秀『ナショナリズム入門』、講談社現代新書、2014年（単著）。

□Kazuhiro Takii/Michael Wachutka hrsg., Staatsverständnis in Japan. Ideen und Wirklichkeiten des japanischen Staates in der Moderne, Nomos, 2016（共著）。

□植村和秀『折口信夫——日本の保守主義者』、中公新書、2017年（単著）。

## □研究テーマ

# 昭和政治思想史と日本ナショナリズム

## □研究の取組み

昭和期日本の政治思想について、ナショナリズムとの関わりに重点を置きながら、世界の他の地域と比較しつつ全体の流れを整理する、ということを試みています。昭和期の日本国家に暮らした人々は、日本が世界強国へのし上がり、世界戦争に敗北し、その後、経済強国にのし上がる、という経験をしました。この政治的変動のなかで、人々が政治についてどのように考え、それがどのような行動へと結びつき、どのような結果をもたらしたのか。ここに私の関心はあります。

昭和期の日本をきちんと理解し、後世に伝えるためには、とりわけ、同時代の他地域との比較が欠かせません。他の国家に暮らした人々の動向を参照し、20世紀の世界の状況のなかに日本の事例を位置付けていくことで、人々が何を問題とし、何に苦悩し、どのように考えて行動したかを、よりバランス良く理解できるようになると思います。私が最初に研究したのは、20世紀前半のドイツと東欧において、当時の人々が政治についてどのように考えたかを、さまざまなナショナリズムとの関わりのなかから明らかにしていく、ということでした。今は視野をさらに広げて、比較の対象を増やそうとしている途中です。

それともう一つ、多数の人々の思想を理解していくためには、キーワードに基づく整理分類が必要となります。その際には、ナショナリズム、保守主義、急進主義、社会主義、自由主義、民主主義、ポピュリズム、原理主義、反知性主義といったキーワード自体を問い直し、その意味をできるかぎり明確にしていく作業が欠かせません。言葉というものは、多くの人が使うなかで、

意味が変わったり曖昧になったりするものです。それは自然なことですが、あまり気にせず放置しすぎると、同じ言葉で違うことを考える人が増え、政治に無用の混乱を招きます。私は、政治に関する言葉の整理は、政治思想史の研究者の重要な課題だと考えます。そのため、キーワードの整備と思想の整理分類とを連動させながら研究を進めています。

令和の時代に昭和を問い直すことは、時期的に急がねばならない課題です。時の流れは、昭和戦後期でさえも彼方に追いやりつつあり、昭和の記憶のない世代がますます増えています。日本国家がその歴史上、もっとも強く世界を揺さぶった時代について、当時の人々の考えを明らかにすることは、昭和の記憶を多少は持ち、日本語で研究のできる私が、世界に貢献できる課題であると考えます。世界史のなかに日本を位置付けるとともに、政治に関する言葉を整理して、過去をより広く、より厳密に理解していくことから、人間の未来は開かれていくと信じています。